日本におけるドナルド・キーン略年譜 1922－1977〈1〉

北　嶋　藤　郷

西暦（和暦）年齢・事跡

1922年（大正11）　　戌歳

6月18日、ニューヨーク市ブルックリンに生まれる。

1929年（昭和４）　　７歳

10月、大恐慌（Great Depression）が米国で始まる。父親（Joseph）は貿易商で、食卓の会話に金銭的な問題にまつわる話がよく出る。(1)

1931年（昭和6）　　９歳

商用でヨーロッパに行く父親と一緒に、約一ケ月のヨーロッパへの船旅に出る。最初の寄港地はアイルランドのコーブ、次に寄港したフランスのシェルブールで下船。パリ万国博覧会を観覧。ナポレオンの墓やベルサイユ宮殿も見学。ウイーン軍事史博物館では、暗殺されたオーストリア皇太子フェルディナンド大公の血染めの軍服を見てショックを受ける。ベルリンを経由してブレーメンに行き、ドイツ客船で帰国。フランスの少年のように、ベレー帽をかぶって、船のタラップを昇る写真が残っている。

1934年（昭和９）　　12歳

妹（Lucille）が突然病死して、一人っ子になる。妹と愛犬（Bingo）とともに撮った写真が残っている。妹の死後、両親の間の不和が表面化する。

1937年（昭和12）　　15歳

両親が離婚。今まで住んでいた家から、母(Eva)と一緒に侘しいアパートに移る。

1938年（昭和13）　　16歳

成績優秀により、「飛び級」を繰り返し、コロンビア大学へ入学を許可される。ニューヨーク州の最優秀生徒として、ピュリッツァー奨学金を取得。コロンビア大学の授業で、マーク・ヴァン・ドーレン教授の古典文学研究の教授法に大きな影響を受ける。のちに英国作家・E.M.フォースターへの紹介状を書いてくれた、ライオネル・トリリング先生もいた。

9月、ミュンヘン協定が調印される。

1939年（昭和14）　　17歳

夏、ニューヨーク万国博覧会開催される。中国人学生・李（Lee）と親

しくなり、万博を一緒に見に行く。漢字に惹かれる。

1940年（昭和15）　18歳

ドイツ陸軍が、デンマークとノルウェー、続いてオランダとベルギーに侵攻。ニューヨークの中心にあるタイムズ・スクエアの地下の本屋で、ゾッキ本として売られていた、アーサー・ウエーリの名訳『源氏物語』（*The Tale of Genji*）と邂逅。箱入り2巻セットで49セント。人間の自由が侵されることを危惧する暗い時代に青春時代を送ったキーンは、『源氏物語』が与えた光明を忘れられぬという。翻訳は夢のように魅惑的で、日本の遠く美しい世界が鮮やかに描かれ、細部まで繰り返し精読する。同時に日本文学を強く意識した。

1941年（昭和16）　19歳

夏、ノースキャロライナ州の山荘で友人らと日本語を学ぶ。初めて覚えた日本語は、「サクランボ」であった。

４年生の新学期が始まった時、角田柳作（つのだりゅうさく）先生の「日本思想史」を受講。日本研究は、当時は人気がなかった。受講生が一人であったので、受講辞退を申し出ると、先生は「一人いれば十分です」（“No, one is enough.”）と諭された。コロンビア大学で「先生」といえばこの人を指すといわれる角田先生に出会い、深い薫陶を受けた。12月７日、日本軍が米国ハワイの真珠湾を攻撃。翌日、ルーズヴェルト大統領が宣戦布告。

1942年（昭和17）　20歳

米国海軍語学校が、翻訳と通訳の候補生を養成していることを知る。２月、この海軍日本語学校に入学するために、列車で大陸を横断して、カリフォルニア大学のバークレー校に到着。日本語の知識に応じてクラス分けられ、６人以上のクラスはなかった。授業は週６日、１日４時間で、毎週土曜日に試験があった。毎日２時間が日本語読解、１時間が会話、１時間が書き取りであった。当時はまだ当用漢字の時代ではなく、字画の多い、昔ながらの本字（ほんじ）の時代で、その苦労はひとしおであった。さらに、翌日の授業に備えて、少なくとも４時間の予習が必要とされた。６月、虫垂炎の手術で海軍病院に入院中、火野葦平の『麦と兵隊』を読む。これが初めて読んだ日本文学作品。翌年１月、入学から11か月後に卒業。卒業生総代として、日本語で「告別の辞」を述べる。卒業生全員が語学将校に任官した。コロンビア大学卒業。構想は温めていたものの、卒業論文は書いていない。

1943年（昭和18）　21歳

2月、海軍語学校を卒業した者の多くは、ハワイの真珠湾へ派遣された。

日本軍に関する書類の翻訳、日本兵の日記の読解、日本兵捕虜の尋問や通訳などに従事。翻訳局で働き始めて数か月たった頃、オーティス・ケーリ（Otis Cary）と共にある作戦に参加。父親が宣教師をしていた北海道の小樽でケーリは育ち、そこの小学校に通ったから、外国訛りの全くない日本語を話した。太平洋戦線の各地で、日本語の解読と通訳をつとめる。
５月、日本軍最初の「玉砕」の地、アッツ島に上陸。米軍はこれを「バンザイ突撃」と呼んだ。(2)
８月、米軍はキスカ島を攻撃。ケーリと共に、真っ先に上陸するように命じられた。

1944年（昭和19）　22歳

ハワイで過ごした1年半は、生涯でもっとも幸せな時期の一つであった。ハワイの捕虜収容所で尋問したある捕虜が、クラシック音楽が聴きたいというので、誰の許可も得ずに、蓄音機とレコードを持ち込む。ベートーヴェンの第３シンフォニー『英雄』は、収容所のシャワールームで、見事に響きわたった。この忘れ難い経験を共有した日本人に、小柳胖（おやなぎゆたか）と高橋潭（たかはしたん）がいた。前者はのちに『新潟日報』社長、「會津八一記念館」初代館長となった人物であり、後者はのちに「国際ペンクラブ東京大会」（1957）で、アメリカ代表の一人として来日したキーンを記者として取材し、旧交を温めた。(3)

ケーリなど4人の戦友と、エイダック島で撮った一枚の写真が残っている。キーンは、右手にカービン銃（一度も発砲したことのない）を、左手に『研究社大和英辞典』（日々ドカン、ドカンと引いた）を抱えている。アリューシャン列島には、約半年間滞在。

1945年（昭和20）　23歳

３月、通訳の一団が真珠湾の艦艇司令部に召集される。新しい作戦のために、沖縄に行くことを命じられる。ハワイからフィリピンへ飛び、そこで沖縄戦に従軍。レイテ島の日本人捕虜が収容されている柵囲（さくがこい）の中に、ミンドロ島で捕虜となり、レイテでの過酷な収容所体験をのちに忘れ難い文章で綴った『レイテ戦記』の作家・大岡昇平がいたかもしれない。４月１日、米軍は沖縄上陸を決行。上陸してすぐに、第96歩兵師団が通訳の将校を求めていることを知り志願。人生で初めて10名ほどの部下をもつ。が、命令の出し方を知らなかった。７月、日本軍の抵抗が終わってから、500人の日本人と500人の朝鮮人捕虜と共にハワイへ戻るように命じられる。
８月、広島への原子爆弾投下をホノルルで知る。真珠湾の部署で司令官から、帰国するかそれとも日本へ行くかと聞かれ、躊躇なくその夜のうちに

グアム島へ飛ぶ。そこで長崎に原爆が投下されたことを聞く。2度目の原爆投下を、トルーマン大統領が嬉々として発表した、と聞いてショックを受ける。第６海兵師団に所属して、戦犯調査のため、中国・青島へ行くことになった。青島に赴任の途中のグアムで、昭和天皇の玉音放送を聞く。日本に行けなくて大いに失望。青島で車夫たちにせがまれて人力車に乗る。人が人を牽くのに恥じ入って、「同じ人間に車を牽かせているのを恥じた私は、強く握った手すりに爪を食い込ませていた」（『キーン自伝』p.94）と述懐している。11月、戦犯調査にいたたまれずに除隊を申請。日本人の将校たちから贈りものを差し上げたいと言われ、扇子を申し出る。扇子がどんなものか知っていたが、発音は「せんし」と思っていた。「私は何よりも『戦死』がほしいのです。」「それは私の青島滞在をしめくくるに何とふさわしい言葉だったろう！」（『日本との出会い』p.48）
12月、ハワイの原隊復帰のため、青島を発ち、上海から厚木へ飛んだ。日本で過ごした１週間の一番鮮やかな思い出は、息子の生存を知らせるため、捕虜の家族を探し歩いたこと。煙突と土蔵のみを残す、一面焼け野原の東京で、古い住所を尋ねあてるのは、不可能に近かった。「日光見ずして結構という莫れ」という俚諺にひかれ、ホノルル翻訳局の仲間と共に、アリューシャン列島の凍土を横断し、フィリピンの森を疾駆した頑丈なジープで、日光見物に行く。華美な建築物が雪に埋もれていて、日本的な美意識をもって鑑賞できた。

木更津から船で日本を離れるとき、昇る朝日を浴びてピンク色に染まった、雪の霊峰富士を見たとき、感動して涙がでそうになる。かつて誰かが言った、「日本を去る間際に富士を見た者は、必ずまた戻ってくる」と。クリスマスの直前にハワイに戻る。除隊を申請。

1946年（昭和21）　24歳

コロンビア大学に戻って、再び角田柳作先生の門下で日本文学を研究。元言語将校の学生が数名いて、平安文学を読みたい者、仏教文学を学びたい者、さらに元禄文学をやりたい者もいた。『源氏物語』『松風』『徒然草』の他にも、たとえば西鶴の『好色五人女』全編を通読した。芭蕉の『奥の細道』も読んだし、近松の『国性爺合戦』も読んだ。先生は専門の「日本思想史」の授業に加えて、それぞれの時代の文学をすべて教えなければならず、学生たちに酷使された。大学院では、角田先生の指導のもとに、修士論文は徳川時代後期の独自の思想家の「本田利明論」を書く。博士論文は『国性爺合戦の研究』だが、この作品も先生の指導で読む。ハワイ捕虜収容所で親しくなった元日本兵と頻繁に文通する。その中で、将来への展

望は未だ開けてないが、学業は捨てたくない思いを伝える。

1947年（昭和22）　25歳

コロンビア大学の角田柳作のもとで、本田利明研究で修士号を取得する。近松門左衛門の人形浄瑠璃『国性爺合戦』の英訳を始める。

秋、ハーヴァード大学に入学。角田先生にこの計画を話すと、修行僧が一つの修行場から次の修行場へと旅して歩くのを「遍参（へんざん）」と言う、といって承認してくれた。コロンビアの大学院に１年半籍をおいた後、１年をハーヴァードで過ごした。ハーヴァードでの一つの喜びは、ウィリアム・フン教授の杜甫（とほ）の詩の講義で、彼が杜甫の長編詩の一つを暗誦した時のこと。母国語の福建語で、身をそらして暗誦するフン教授の目には、涙が湛えられていた。「私がなりたいのは、こういう教授だ」と思った。また当時、日本史の助教授をしていた、エドウィン・ライシャワーの講義を受け、時々、昼食を共にした。「GIビル（復員兵援護法）」に基づく教育給付金（退役軍人の授業料の３年間無料）が切れることに気づく。ヘンリー奨学基金を志望し、幸運にもケンブリッジ大学への特別奨学基金を手に入れる。一年間、好きな研究がケンブリッジで開始できる期待に胸を膨らませる。

1948年（昭和23）　26歳

英国に渡る途中のパリで一か月を過ごす。博物館のリストを持って、全部訪ね回る。町の古い地区を探訪して、通りの名前に、また思いがけない壮麗な古い建築のたたずまいに心をおどらせる。「私は市そのものに恋した。生涯に２度、私はこのようなよろこびを味わっている―1948年のパリと1953年の京都である。」（『日本との出会い』p.53）

ケンブリッジで研究活動を開始し、学部生に日本語を教える。日本語の会話の授業担当。

ヨーロッパでの最初の年に、一番刺激的な事件が起きたのは、ケンブリッジではなく、イタリアだった。夜行列車がミラノ駅に着いて、新鮮な外気を求めてプラットホームに下り立った10分間ほどの間に、博士論文が入ったスーツケースもタイプライターも姿を消していた。ローマでクリスマス休暇を過ごしたが、原稿は一枚も戻らなかった。ミラノでの災難のあと、ディキンズ夫人は、傷心のキーンを自分のもう一人の息子のように遇した。イギリスに５年滞在したが、２年間はディキンズ夫人の家に住んだ。彼女は著名な英文学の碩学サー・ハーバート・グリアースンの娘で、詩というものが食事のように、毎日の生活の一部になっている家庭で育った。夫人は、マーク・ヴァン・ドーレン先生についで、もっとも影響を与えた教師でもあった。またコロンビアのライオネル・トリリング先生が、

小説家E.M.フォースターへの紹介状を書いてくれて、この作家とも知り合う。

ケンブリッジでは、『西洋哲学の歴史』の著書で知られる、バートランド・ラッセル卿の哲学の授業にも出た。授業のあと、先生はビールに誘ってくれて、天にも昇る気持ちであった。ラッセル卿は、恋愛したことがあるかどうか、とキーンに尋ねたことがある。そして、「かりになかったとしても、別に驚かないがね」と付け加えた。この年より5年間、ケンブリッジ大学に学び、かつ日本文学・日本語を教える。

1949年（昭和24）　27歳

ケンブリッジ大学大学院修了。同大学で日本学の講師となる。

1950年（昭和25）　28歳

『源氏物語』を、信じられないような美しい英語に書き直した、偉大な翻訳家アーサー・ウエーリは、大英博物館の近くのゴードン・スクエアに住んでいた。彼に初めて会ったのは、彼がケンブリッジでアイヌの叙事詩「ユーカラ」について講義した時である。当時60歳のウエーリは、価値判断に高い水準を持っていて、お世辞とは無縁の人であった。英国に滞在していた頃のロンドンの思い出は、ウエーリと音楽にまつわることばかりだが、ロンドンで観たマリア・カラスの『ノルマ』は、オペラ観劇の経験すべての中で最高の舞台であった。

1951年（昭和26）　29歳

戦後初の東洋学者の会議がイスタンブールで開催された。参加する友人数名と英国製のジープを駆って英国からイスタンブールまで旅行し、これに出席した。

近松門左衛門作『**国性爺合戦**』（*The Battles of Coxinga*）の研究論文で、コロンビア大学よりPh.D.を取得。この論文は、London: Taylor's Foreign Press より出版。処女出版。

1952年（昭和27）　30歳

夏季休暇にコロンビア大学に戻り、『日本の伝統の源泉』（*Sources of Japanese Tradition*）のための執筆と翻訳に参加。日本での研究奨学金がもらえそうな幾つかの財団を訪ねる。

第２書『**日本人の西洋発見**』（*The Japanese Discovery of Europe 1720–1830*）を出版。

ケンブリッジ大学で、「日本の文学」を5回連続講義する。大教室に参加者は約10名。

『遠東季刊』（The Far Eastern Quarterly）8月号に、佐佐木信綱著『上代文學史』の書評を書く。

1953年（昭和28）　31歳

５月、佐佐木信綱著『上代文學史』の書評が『文學』（岩波書店）に、玉井乾介譯で掲載される。（『文學』pp.73-78参照）[4]

フォード財団から研究奨学金を得て京都大学大学院へ留学が実現。

６月、英国を発つ。ロンドン発の切符は、エジプト、インド、セイロン、シンガポール、インドネシア、タイ、カンボジア、香港を経由して最後に日本に到着することになっていた。

８月、羽田着。その日、京都行の最終列車に乗って、「関ヶ原」経由で翌朝京都に到着。数週間後、同志社大学で教えていた、オーティス・ケーリの紹介で、今熊野の奥村綾子さんの家の付属家無賓主庵（むひんじゅあん）に下宿する。「無賓主庵」の扁額は、建仁寺住職の竹田黙雷禅師の揮毫になるもので、「炉辺には主人も客もない」という意味である。（無賓主とは『景徳伝燈録』の中の「火炉頭無賓主」に由来する。）

この家は、以前飛騨から京都に移されもので、囲炉裏と茶室と、それに昔の農具がたくさんおいてある巨大な玄関が付いていた。やがて奥村家の下宿人になった京都大学助教授・永井道雄と終生の友となる。

10月、京都大学大学院の授業に出席。休講が多いのに失望する。京都大学の吉川幸次郎教授の助手を務めていた、バートン・ワトソンと知り合う。彼は最も優れた中国文学の翻訳家の一人で、越後の禅僧良寛の漢詩の名訳者でもある。当時の京都には自家用車は一台もなく、等持院の霊光殿や龍安寺の静寂を味わう。仁和寺（にんなじ）、東寺、金閣寺、銀閣寺等々を訪問する外国人案内役も引き受ける。京都大学大学院に3年留学し、日本文学研究の傍ら狂言師・茂山千之丞（せんのじょう）に狂言の指導を受ける。

10月、伊勢神宮の遷宮を拝みに、三重県伊勢市を訪問する。

秋、ケーリのスクーターに同乗してきた、同志社大学の北垣宗治助手の訪問を受ける。彼がイギリス留学に際して、英国の大学と英国人について話をしてもらうためであった。

『日本の文学』（*Japanese Literature: An Introduction for Western Readers*）をロンドンのジョン・マレー（John Murray）社から「東洋の知恵」叢書として出版。

1954年（昭和29）　32歳

日本を代表する作家、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫らと知り合う。友人のE. サイデンステッカーに頼まれ、彼の英訳本『蓼（たで）食う虫』を携え、下鴨の谷崎邸を訪問する。また、吉田健一とも知り合うが、優雅な英語を話す吉田とは、普通英語で話し合った。[5]

11月、三島由紀夫の芝居『鰯売恋引網（いわしうりこいのひきあみ）』が歌舞伎座で上演されている

時、三島由紀夫に会う。永井道雄の紹介で、中央公論社の嶋中鵬二を知る。嶋中の紹介で、木下順二と三島由紀夫を知る。特に三島との交遊関係は彼の死まで続いた。
初めて発表された日本語記事「西歐人の源氏物語の観賞」は、岩波の雑誌『文學』（1954年2月号）に発表された。pp.111-15.
『文藝』（９月号）に、三島由紀夫『潮騒』の書評を掲載。pp.42-43.

1955年（昭和30）　33歳

１月、嶋中鵬二の勧めで、「中央公論」のために６本の原稿を執筆。のちに**『碧い眼の太郎冠者』**（1957）という本に纏められた。日本を去る前に、月の光に照らされた龍安寺の石庭や醍醐の桜を鑑賞。また芭蕉が「奥の細道」に描いた道筋を、２～３週間かけて辿る。
『日本文学選集』（***Anthology of Japanese Literature***）（全２巻）New York: Globe Press.
『中央公論』（６月号）に、「紅毛奥の細道」（筆者・剣橋大學講師）を掲載。pp.170-80.
日本留学を終えて、アメリカに帰国。コロンビア大学助教授に就任。

1956年（昭和31）　34歳

８月、直江津経由で佐渡島を初めて訪問。両津のホテルで、国の無形文化財に指定されている文弥人形劇を見物。この旅行の終りに芭蕉の名吟、「荒海や佐渡に横たふ天の河」を思い起こし、次の句を作詠。**〈罪なくも流されたしや 佐渡の月〉**[(6)]
９月13日夜、東京・喜多能楽堂で開催された「ドナルド・キーン氏送別狂言会」で『千鳥』の太郎冠者（たろうかじゃ）を演じる。300名の観衆の中には、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、松本幸四郎（8代目）などの著名人も交じっていた。生涯に一度の晴れ舞台。翌日の『朝日新聞』（夕刊）には、「芸術院会員になれそうな出来ばえ」と誉めちぎられる、とある。
　コロンビア大学の日本文学の助教授として迎えられて、日本語と日本文学を教える。1950年代の後半は、9月から5月末までコロンビア大学で教え、長い夏の休暇は京都で過ごす。
ドナルド・キーン編**『日本文学選集』**（***Modern Japanese Literature***）NY: Grove Press.
太宰治『斜陽』（***The Setting Sun***）を翻訳。[英文版]New York: New Directions, 1956.

1957年（昭和32）　35歳

　三島由紀夫の近代能『班女』を翻訳。英国の雑誌『エンカウンター』

（１月号）に掲載。東京と京都で開催された国際ペンクラブ大会のアメリカ代表の一人に選ばれる。会議のテーマは、「東西両洋文学の相互的影響」。アメリカ代表には、ジョン・スタインベック（1962年にノーベル賞受賞）ラルフ・エリソン、ジョン・ドス・パソス、ジョン・ハーシー、キャスリーン・レインなどがいた。日本ペンクラブ会長は川端康成であった。数日後、大会は東京から京都に移る。スティーヴン・スペンダー、アンガス・ウィルソン、アルベルト・モラヴィアを苔寺に案内した。また、高見順、ジョン・ドス・パソス両氏と一緒にテレビの座談会に出演する。
８月、「幸四郎について」文學座公演・福田恒存作『明智光秀』のパンフレット。pp.4-5.

夏、三島由紀夫が、『近代能楽集』の翻訳出版のためにニューヨークに来る。彼の近代能楽の興行を企画した若いプロデューサーたちは、後援者が見つからず、資金集めに難渋し、ニューヨークでの上演は実現しなかった。三島は上演を待って、4カ月もこの街に留まっていたが、落胆した三島は、大晦日にヨーロッパへ旅立った。

日本語で書いた最初の本、**『碧い眼の太郎冠者』**谷崎潤一郎の序文付で、中央公論社より出版。のち解説・丸谷才一で中公文庫 1976 。
『日本人の西洋発見』藤田豊・大沼雅彦共訳で錦正社より出版。のちに芳賀徹訳、中公叢書 1968、中公文庫 1982。
三島由紀夫『近代能楽集』（***Five Modern Nō Plays***）を英訳。版元NY: Alfred A. Knopf.

1958年（昭和33）　36歳

この年から1961年までの主な仕事は、近松門左衛門の戯曲を11編翻訳することであった。「国性爺合戦」と「曽根崎心中」の訳を数年前に出版していたが、掛詞（かけことば）や縁語（えんご）も英語で再現しようとしたので、訳業は依然として責め苦であった。次に挙げるのは、「心中天網島（しんじゅうてんのあみじま）」の滑稽な敵役（かたきやく）の太兵衛の歌の原文とキーン訳を[註]で紹介する。(7)

高峰秀子と対談「青い目の見た日本さまざま」『サンデー毎日』９月７日増大号。pp.36-41.

1960年（昭和35）　38歳

コロンビア大学東洋学部日本語・日本文学教授に就任。
１月、「D. キーンの日本芸術レポート《その創造者たち》」芸術新潮
太宰治『人間失格』（***No Longer Human***）を英訳。版元 New York: New Directions.

1961年（昭和36）　39歳

コロンビア大学からサバティカル（有給休暇）をもらい、演劇研究のため、日本で一年半過す許可を得る。能や歌舞伎などの鑑賞のため、京都から東京（原宿）に居を移す。毎週一番の楽しみは、「鉢の木会」で、吉田健一、大岡昇平、河上徹太郎、石川淳や篠田一士（はじめ）などに会うことであった。吉田は、ケンブリッジでの公開講義に基づいた著書、**『日本の文学』**（*Japanese Literature*）を褒めてくれて翻訳した。彼は日本語よりも英語で話したくなる数少ない日本人のひとり。吉田が特に愛したのは日本酒で、新潟の酒を飲みながら、「月の光を飲んでいるようだ」（“liquid moonlight”）と言った。

秋、金春流の能役者・桜間道雄（のちに人間国宝）から謡曲をならう。

『曽根崎心中』（*The Love Suicides at Sonezaki*—Bunraku: National Puppet Theater of Japan. New York: Columbia University Press）

『近松門左衛門傑作集』（*Major Plays of Chikamatsu,* Columbia Univ. Press）近松門左衛門の浄瑠璃11曲を翻訳。深沢七郎『楢山節考』、宇野千代『おはん』、石川淳『紫苑物語』の中編小説3編の翻訳を一巻にまとめ、『老婆、妻、そして射手』（*The Old Woman, the Wife, and the Archer*）と題して出版。［英文版］New York: Viking Press.

Modern Japanese Novels and the West　University of Virginia Press.

1962年（昭和37）　40歳

２月、ロンドンに着いて、アーサー・ウエーリの家に直行。交通事故で右腕を骨折した先生と、彼が40年間、一緒に暮らしたベリル・デ・ゾーテを見舞う。彼女は、病気にかかる方も見る方も辛い舞踏病で死にかけていた（３月４日死去）。深い悲しみの雰囲気の中で別れたが、これがウエーリ先生の見納めになった。ケンブリッジに行くと、伯母からの手紙が来ていて、母の容態が悪くなっているとあり、翌日発った。ニューヨークに着いた時、母は臨終だった。その夜真夜中の嶋中鵬二からの電話で、菊池寛賞を受賞したことを知った。母の葬儀が終わると、ただちにニューヨークを発ち、ホノルル経由で東京着。ライシャワー大使夫妻が昼食会に招いてくれた。菊地寛賞を授与してくれた文藝春秋の編集者たちに加えて、最も親しい友人たち、嶋中鵬二、三島由紀夫、吉田健一の姿もあった。受賞パーティーでは、シェークスピア翻訳の賞賛のしるしとして、近松の翻訳を捧げた福田恒存、ニューヨークで親しくなった有吉佐和子、作家の伊藤整、その他多くの友人たちに再会した。

菊地寛賞の受賞理由は、古典及び現代日本文学の翻訳による海外への紹介。この賞の定義は、「永年文壇生活をし、今尚倦まない証拠には昨年度

相当な力作を発表した所の一時代前の作家を敬彰する意味で銓衡する」とある。(『文藝春秋』s.14.4.)

1963年（昭和38）　41歳

夏、アフリカを回って日本に行った。１ケ月半で10カ国を巡る資金を、某財団からとりつけるすべての手はずを、ある人類学の友人が整えてくれた。この資金の唯一の条件は、求められればどこでなりと、日本文学について講演を行うこと、というものであった。コートジボアール、ガーナ、ナイジェリア、マダガスカル、モーリシャスで講演したが、日本文学を主題にした講演は、これらの諸国の歴史上おそらく最初のものであったであろう。ナイジェリアのイバダン大学では、講演に加えて、能の狂言のパフォーマンスも披露した。

『日本の文学』(***Japanese Literature,*** *An Introduction for Western Readers*) が吉田健一訳　解説三島由紀夫で、筑摩書房から出版。のち中公文庫 1979。

三島由紀夫の小説『宴のあと』(***After the Banquet***)を英訳。版元 NY: Alfred A. Knopf.

中央公論社の全集「日本の文学」の編集委員となる。(他の編集委員たちは、第一級の小説家たち、谷崎、川端、高見、伊藤、大岡、三島であった。)

1964年（昭和39）　42歳

１月、ニューデリーで東洋学者の国際会議が開催された。この会議に参加すれば、日本に10日間滞在することが許された。このうち4日間は、中央公論社主催の講演旅行で、伊藤整、平林たい子、大江健三郎の諸氏と一緒だった。大江の「個人的な体験」の文体の威力に感心したし、「万延元年のフットボール」の音楽的といってもよい構造に感銘を受けた。

秋、安部公房の『砂の女』の英訳本が出版されるところで、作家がニューヨークを訪問することを知り、会う約束ができた。安部は真摯この上もない、正直一徹な作家であり、彫心鏤刻(るこく)の作家である。その独特な文体は、素晴らしい滑稽さを盛り込むことを妨げない。

通訳の若い女が一緒だったが、彼女には目もやらず、通訳なしで話をすすめたが、その女性が、他ならぬオノ・ヨーコだったことが分かったのは、それから数年後のことであった。

古代から現在にいたる「日本文学の歴史」を書く計画を思いつく。英語で書かれた「日本文学史」といえば、アストンが1899年（明治32）に発表した、草分けの仕事が一冊あるだけであった。日本文学史のあらゆる時代に通暁しているわけではないけれど、とうとう自分の本を書かなければ

ならない、という結論に達する。当初は、日本文学の美を明らかにする楽しい本を書きたいと思ったが、レニングラードでのイリーナ・リヴォーヴァ教授との会話から、日本文学史の構想が決まる。1993年、**『日本文学の歴史』**（全18巻）の最終巻が刊行された。その完成までに、四半世紀を要したライフワーク。

恩師・角田柳作が11月29日に死去。癌を患い日本への帰途ホノルルで客死。86歳。[8]

Four major plays of Chikamatsu, New York: Columbia University Press.（『曽根崎心中』『心中天網島』『国性爺合戦』『寿門松』を含む）

1965年（昭和40）　43歳

フォルメントール賞のアメリカ審査団の一人になる。この賞の国際賞は、最も脂の乗り切った時期にある作家の最新作に与えられる。これと違ってノーベル賞は、一般に最高傑作を書いてからだいぶ時間が経過している作家に与えられる傾向にある。選考会は、オーストリアのザルツブルグで開かれた。アメリカ審査団は、三島由紀夫の『宴のあと』を推挙し、英国審査団は、フランスの小説家ナタリー・サロートの『黄金の果実』を支持した。

1966年のフランス南部、1967年のチュニスで開かれたフォルメントール賞選考会でも三島を推したが、いずれも失敗。チュニスで敗北した後、スウェーデン最大の出版社の社長・ボンニアが慰めてくれた。「三島は間もなく、遥かに大きな賞を獲得するだろう」と。それは、ノーベル文学賞以外にあり得なかった。ノーベル賞の順番が日本にまわってきたのは、1968年であるが、受賞者は三島由紀夫ではなくて、川端康成であった。

『能』（***Nō: The Classical Theatre of Japan***）松宮史郎訳で、講談社より出版。

太宰治『斜陽』の翻訳を原書房から出版。（英和対照：現代日本文学英訳選集）

『文楽』（*BUNRAKU: The Art of the Japanese Puppet Theatre*）吉田健一訳 金子弘撮影 谷崎潤一郎序文で、講談社より出版。（のち**『能・歌舞伎・文楽』**として講談社学術文庫）

1966年（昭和41）　44歳

６月27日、アーサー・ウエーリ死去。訃報の知らせを受けたあとで、本人からの手紙が届く。東洋への熱い視線を向け始めたブルームズベリー・グループの風を受け、日本文学の価値を世界に問うた天才は、76年の生涯を閉じた。

能役者・本間英孝（ふさたか）（佐渡・宝生流）が、アメリカの大学での能の旅興行をしたい、と熱心に言ってきたので、能のアメリカとメキシコ公演に力を

貸したことがある。いろいろな大学の友人に、約200通の手紙を書き、36の公演を取りつけた。宝生英雄を長とする宝生流のグループの旅は、過酷なスケジュールを良心的にこなし、無条件の成功を収めた。「清経」などを観た観客の鑑賞力と賛辞は、旅興行の準備の苦労に報いてくれた。

Nō: The Classical Theatre of Japan photographs by Kaneko Hiroshi Kodansha International LTD. Hardback edition.

Death in Midsummer New Directions（三島由紀夫『真夏の死』の翻訳）

1967年（昭和42）　45歳

春、安部公房の親しい友人である、大江健三郎が三人で食事をしようと提案したことがあり、三人は中華料理を食べに行き、老酒（ラオチュー）を浴びるほど飲んだ。その時以来、安部とキーンは盟友となる。

吉田兼好『徒然草』（***Essays in Idleness:* The *Tsurezuregusa* of Kenkō**）を翻訳。版元は、NY：Columbia University Press. ペーパーバック版：Charles E. Tuttle Co. 1981.

三島由紀夫の戯曲『サド侯爵夫人』（***Madame de Sade***）を翻訳。版元New York: Grove Press.

1968年（昭和43）　46歳

12月、**『日本人の西洋発見―本田利明とその他の発見者たち』**（***The Japanese Discovery of Europe:*** 1720－1830）が芳賀徹新訳で、中央公論社より出版。のち中公文庫 1982。

川端康成が、日本人で初めてノーベル文学賞を受賞する。

『歌舞伎』戸板康二と共著で淡交新社より出版。

『古典へのいざない』井上靖・臼井吉見編　ドナルド・キーン他著

1969年（昭和44）　47歳

メキシコ大学で約一か月間、日本文学を教える。

安部公房の戯曲『友達』（***Friends***）を翻訳。版元 NY: Grove Press.

Thirst for love 版元 Alfred A. Knop（三島由紀夫『愛の渇き』の翻訳）

11月、三島由紀夫と彼の私兵である「盾の会」は、国立劇場の屋上でパレードを演じた。国際出版文化賞を受賞。

1970年（昭和45）　48歳

８月、下田で家族と一緒に過ごしている三島由紀夫から招待される。

９月、ニューヨークに向かう飛行場に三島が見送りに来る。

11月25日、自衛隊市ヶ谷駐屯地にて、三島自決。

『謡曲20選』（***Twenty Plays of the Nō Theatre***）New York: Columbia University Press.

Plays of the Nō Theatre は、キーンの編集で、序文を執筆。また「道成寺」を訳す。

1971年（昭和46）　49歳

東京都文京区西片に住む。（毎年、日本滞在は6月～翌年1月まで）

１月、助成金を得て、オーストラリアのキャンベラ大学で開催された国際東洋学会に出席。

第28回オリエンタリスト会議で、「三島由紀夫」を講演。

1月24日、築地本願寺にて、三島の葬儀の弔辞を引き受けたものの、出席を断念。葬儀委員長を務めたのは川端康成であった。あとで三島夫人を訪問、三島の写真を飾った祭壇に、彼に捧げた翻訳本***CHŪSHINGURA (The Treasury of Loyal Retainers)***竹田出雲ほか『仮名手本忠臣蔵』を置いた。下田で会った時、三島自身がこの浄瑠璃から選んだ、下記の一節が〈題辞〉として掲げられていた。

国治まってよき武士の忠も武勇も隠るゝに

たとへば星の昼見へず、夜は乱れて顕はるゝ

２度目の佐渡島訪問。新町大神宮で、文弥人形劇を観劇。演目は『源平ひらがな盛衰記』。出し物は、木曾義仲を扱ったもので、巴御前の人形を、文弥人形の遣い手の第一人者・濱田守太郎が遣った。また宝生流の本間家能舞台で、『船弁慶』を観劇。この佐渡旅行で、長谷寺や蓮華峰寺（れんげぶじ）、小木民族博物館なども訪問。最終日に、佐和田で講演。

『**日本文化論**』（***Landscape and Portrait:*** *Appreciations of Japanese Culture*）講談社インターナショナルより出版。『日本の作家』、『日本人の美意識』などに一部収録。

新潮社のPR紙『波』（11月号）に、「日本文学を読む」の連載を開始。～1977.6.　全66回。

The Battles of Coxinga, Cambridge, At the University Press.（近松門左衛門『国性爺合戦』、1951年版の再版）。そして***Kabuki,***（Watherhill/Tankosha)を出版。

Chūshinngura **,** New York: Columbia University Press.

1972年（昭和47）　50歳

秋の外国人日本文学研究家会議の発起人であった川端康成が自殺。ニューヨーク滞在中の大岡昇平は、この知らせをうけ、「ノーベル賞が三島と川端を殺したのだ。」と語った。

自伝『**日本との出会い**』（***Meeting with Japan***）篠田一士の訳で、中央公論社より出版。のち中公文庫 1975。英文版の出版は、東京：学生社版 1979。

『**日本人と日本文化**』司馬遼太郎との対談。中公新書として出版。中公文庫1984。
２月、『**日本の作家**』中央公論社より出版。のち中公文庫 1978。（書下し「三島由紀夫論」を中心に、国際的視野に立つ近代日本作家論）
安部公房と対談。翌年、『**反劇的人間**』として刊行する予定。

1973年（昭和48）　51歳

『**反劇的人間**』安部公房と対談。中公新書として出版。のち中公文庫1979。
７月、『**悼友紀行―三島由紀夫の作品風土**』徳岡孝夫と共著で、中央公論社から出版。
10月、日本航空の社内誌『OHZORA』に紀行文を連載開始（全12回）
『**生きている日本**』（*Living Japan*）江藤淳・足立康訳で、朝日出版社。改題・増補改訂『**果てしなく美しい日本**』足立康改訳で、講談社学術文庫2002。
『**東と西のはざまで**』大岡昇平と対談。朝日出版社より出版。キーン他30名。
Nō: The Classical Theatre of Japan Kodansha International Ltd. Paperback edition. *Bunraku,* Kodansha International Ltd.

1974 年（昭和49）　52歳

東京都・北区西ヶ原に居を構え、毎年6月から翌年1月まで日本で生活する。
１月、週刊朝日に「ドナルド・キーンの日本文学散歩」を連載開始。翌年９月まで継続。

1975年（昭和50）　53歳

５月13日、安部公房がニューヨークに到着。
同日、同氏は、コロンビア大学より、名誉人文科学博士号の称号を受ける。
15日、安部が尊敬するアメリカの作家、フリップ・ロスを紹介。21日、アメリカの作家、バナード・マラマッドと晩餐会。
『**日本文学散歩**』（*Some Japanese Portrait*）篠田一士訳で、朝日新聞社より出版。英文版*Some Japanese Portrait*は、講談社インターナショナルより出版1978。日本文学史上の巨星の周辺で、逆光の美を放つ個性的人物群を描く。
安部公房『棒になった男』（*The Man Who Turned into a Stick*）を翻訳。東京大学出版。 勲三等旭日中綬章受章。

1976年（昭和51）　54歳

『**日本文學史 近世篇**』（*World Within Walls: Japanese Literature of the Pre-*

Modern Era, 1600－1867）全2巻 徳岡孝夫訳で、中央公論社から刊行開始 1976-77 中公文庫 全3巻 2011。New York：Holt, Rinehart and Winston, New York 1976版からの訳出。（**『日本文學史』**はのちに**『日本文学の歴史』**と改題。）

８月、佐渡島へ３度目の訪問。このときの旅を「佐渡紀行」として、『中央公論』10月号に発表。訳者は中矢一義。１日目は、文弥人形を観劇。翌日は、両津市郊外潟上の本間家能舞台で能を観劇。宝生流本間英孝氏が特別公演した。

1977年（昭和52）　55歳

７～12月、新潮社の文化講演会で「日本を理解するまで」を講演。（新宿・紀伊国屋ホール）

８月、吉田健一死去。

『ドナルド・キーンの音盤風刺花伝』中矢一義訳で、音楽の友社より出版。のちに改題**『わたしの好きなレコード』** 中公文庫 1987。

Japanese Literature in the World〈Book I〉Yumi Sobo　近松門左衛門（Japan's First Professional Dramatist）を執筆担当。

ささやかなアポロギア（apologia）を一言。91歳を過ぎてなお精力的に執筆活動や講演活動を続けている、現役日本文学研究家の「日本におけるドナルド・キーン略年譜」の作成の目的は、キーン氏の膨大な業績の森に足を踏み入れる時、いつも机辺においてこれを標（しるべ）として参照したい、という極（ごく）個人的な理由からである。年譜作成に当たっては、原則的に自分の目に触れた業績だけに絞ることにしたが、意図的に省いたものより、知り得ないで省いたものも少なくないであろうことを恐れている。「文献は文献を呼ぶ」ということは知ってはいたが、このように文献が芋蔓式に増えていくとは思わなかった。“Bibliography is the most exacting of inexact sciences. Perfection in it is particularly elusive.”というジョージア大学のR. ハウエル氏の言葉を改めて想起した。

年譜作成に当たっては、ドナルド・キーン・センター柏崎、東京北区中央図書館、敬和学園大学図書館、共立女子大学図書館、新潟大学図書館、新潟県立図書館、新潟市立図書館、さらに国立国会図書館、コロンビア大学図書館等々の収蔵書を参照。ドナルド・キーン日本文化センター所長・D. ルーリー氏によれば、コロンビア大学が収蔵するドナルド・キーンの著

書は、洋書は124冊（そのうちの109冊は英語）、和書は97冊であるという。また、『**ドナルド・キーン著作集**』1～9巻（新潮社版）の精緻な「解題」を参考にした。

ドナルド・キーン氏からは折に触れて、直接ご指導を賜った。個人的にもお世話になった方々の名前を数えあげると枚挙にいとまがないので割愛するが、キーン家の上原木呂氏と学芸員の石黒志保さんには、特にご協力いただいたことを記して謝意を表したい。

[註]

(1)　1929年10月、ウオール街のＮＹ株式市場大暴落を契機として起こった世界的な恐慌。産業や経済に大きな打撃を与え、1933年ごろまで続いた。貿易商であったキーンの父・ジョセフの商売にとっても、大きな打撃であったにちがいない。

The Great Depression began when I was seven. From then on, conversation at the dinner table often was related to my father's financial problems, a subject never discussed by the people in the films.（*Chronicles of My Life,* p.4）

父とヨーロッパ旅行を契機に、外国語に目覚め、特にフランス語に惹かれ、中学校からフランス語を学ぶ。フランス語は現在も自由に使える言語である。ケンブリッジ大学時代は、日本文学に対する関心の低さに絶望し、ロシア語に転じようかと学んでみたが、自分には、日本語が一番合っていることを再確認して、日本文学研究を続行。また、戦争中に捕虜から習った韓国語も教えた。

「キーン氏と外国語」について言えば、上記のほかに中国語、ラテン語、古代ギリシャ語、スペイン語、オランダ語、そして趣味のオペラでイタリア語を学んだ。日本語の他に講演したことのある言語は、母語の英語、フランス語、スペイン語である。

(2)　俳人・加藤楸邨（しゅうそん）もアッツ島について句を詠んだ。アッツ島の守備隊と連絡しようとしたが返事がない。兵士たちは全滅したのだ。俳句は、「アッツ島応答なし」と題されている。〈こたへなし百合の花粉ははなびらに〉（『**日本人の戦争**』p.47）

(3)　ドナルド・キーン編『**昨日の戦地から**』には、「東京のオーティス・ケーリから青島のドナルド・キーンへ」（1945.11.25）という手紙の中に、〈オヤナギ家の人々〉のことが言及されている。小柳胖（1911-86）は同盟通信社などを経て、1938年から、新潟毎日新聞副社長、新潟日日新聞常務などを歴任した。戦後は、新潟日報代表取締役社長のほか、會津八一記念館初代館長をも務めた。

坂口献吉日記によれば、「（46年）十月に小柳胖氏が帰還し、今年の一月から編集局長となって実務についた」とある。新潟日報から出征した中で、もっとも劇的な運命をたどったのは小柳だろう。激戦地の硫黄島に送られ、45年8月末には戦死の記事が掲載された。だが、実際には米軍の捕虜となり、ハワイの捕虜収容所に送られていた。ここで所長であったオーティス・ケーリと出会い、記者経験のある捕虜と、日本人向けの宣伝ビラ「マリヤナ時報」を作ることになる。海軍情報将校としてハワイにいた、ドナルド・キーン氏は、小柳と会っている。「イン

テリでリーダー格。ケーリさんと深い友情で結ばれていた。日本の将来について2人はいろいろ話していた。」とキーン氏は、当時を回顧する。

絶望的な戦況を知った小柳は、同胞に情報を伝えたいと思ったのではないか。とはいえ、昨日まで皇軍であった身であるから、相当なジレンマがあっただろう。小柳らが作成したビラには、ポツダム宣言受諾通告などが書かれ、これがまかれたことが終戦を早める形になった。(上前潤一郎『太平洋の生還者』と「新潟日報」(2007.3.27)、(2013.6.15)、また、***FROM A RUINED EMPIRE,*** pp.217-24を参照)

(4) 『文學』(岩波書店)編集部から駁論を書くように求められた佐佐木信綱は、「キーン氏の上代文學史評を讀みて」(昭和28年7月号)という一文を書いている。終始冷静な語り口であるが、最後に「おそろしくよくない書物(Surprisingly bad book)である」といわれたことに対しては、遺憾の意を表する」と結んでいる。(『文學』p.118-20参照)

(5) 吉田健一(1912-1977)評論家、英文学者、小説家。吉田茂の長男。ケンブリッジ大学中退後、翻訳に従事。ドナルド・キーン著『**日本の文学**』(中央公論社)の翻訳者。吉田の翻訳も三島由紀夫の解説も秀逸である。「吉田の英語は、単に流暢というだけではなく、イギリス人の間でも、もはや珍しくなってきた、一種の優雅さを伴っていた。」とキーン氏は語る。(『声の残り―私の文壇交遊録』(朝日文芸文庫)p. 65 参照)

「時々彼は、ひどく古風な表現を使って、私をうっとりさせてくれた。例えば、私ならもっと普通な言い方で、“Does he speak French?”というところを、彼は“Has he the French?”といったものだ。」(『**このひとすじにつながりて**』p. 251参照)

ある日、吉田邸での「鉢の木」の会という集まりに招かれた。雪の日、客に暖を与えるために、自分が一番大切にしている鉢の木三本を、あえて犠牲にした謡曲『鉢木』の主人公、佐野源左衛門のひそみに倣って、もともと数人の作家が集まり出したのが、この会であったのだ。戦後の食べ物も酒も乏しかった折のことだから、主人役は、客をもてなすために源左衛門の盆栽とほとんど同じぐらい大事なものを、提供しなければならなかったのである。このグループの顔ぶれは、吉田の他に三島由紀夫、大岡昇平、中村光夫、福田恒存などがいた。その外に、日本では、谷崎潤一郎、川端康成、永井荷風、木下順二、火野葦平、伊藤整、司馬遼太郎、安部公房、開高健、大江健三郎、有吉佐和子、瀬戸内寂聴、平野啓一郎などの作家や文化人と交遊。

2011年まで、一年の約半分(6月～翌1月)を日本に在住し、日本文学・文化の研究に専念。日本文学・文化関係の研究書、翻訳書、エッセイなどは、枚挙にいとまがないほどの多くの書物を著す。日本文化と日本文学の世界の架け橋となって半世紀。

その長年の功績に対して、菊池寛賞、国際交流基金賞、読売文学賞、日本文学大賞、全米文芸評論家賞、毎日出版文化賞、安吾賞等を受賞。文化功労者。勲二等旭日重光章と文化勲章等々を授章。

(6) Though guilty of no crime
I would gladly be exiled－
The moon of Sado ***The Blue-Eyed Tarōkaja*** p.171

2013年９月29日、開館記念講演「私と新潟・柏崎」（柏崎市文化会館アルフォーレ）の冒頭で、キーン氏は、新潟県との縁(えにし)の始まりとして、1956年、直江津経由で佐渡島を初めて訪問したことから語り起こした。現在までに、少なくとも５～６回は佐渡島を訪れた、と語った。

（1956、1971、1976、1996、2009の「略年譜」を参照）

キーン氏自身が今までに、何句俳句を詠んだかは不詳。次に彼の句を２句紹介する。

・ゆく夏や田ごとを守る石地蔵　（**『ドナルド・キーン著作集』**⑧ p.380）

・涼しさや祭りの後乃(の)秋の朝（「東京新聞」2013.9.8）

キーン氏は、1953、1973、1993、2013と式年遷宮に4回参加。本句は1973年の句。1993年には、司馬遼太郎と参列した。2013年についていえば、「御白石持ち奉献」または、「御白石持ち行事」は、伊勢市のいくつかの町内が、それぞれ７月から８月にかけての土曜か日曜の日を決めて行う、遷宮に関連した民間行事。キーン氏は、８月10日の一ノ木町の「御白石持ち奉献」に参加。白い石を樽の中に入れて積んだ車を曳いて伊勢神宮まで運ぶ。そして車を曳いて行った町内のたぶん数百人の人たちが、その石を手に持って神殿のある地域に敷き詰める、という行事。国文学者の小西甚一氏の弟子・奥野純一氏が一ノ木町に住んでいるので、キーン氏は奥野さんの親族という立場で参加した。10月２日は、内宮の遷御の儀（遷宮）で神様が、いわば引越しする、クライマックスの儀式である。

(7)　「紙屋の治兵衛。小春狂ひが杉（過ぎ）原紙(はらがみ)で。一分小半（小判）紙塵々（散る）紙で。内の身代漉（透き）破紙(やれがみ)の。鼻もかまれぬ紙屑(かみくず)治兵衛」。

Jihei the paper dealer－
Too much love for Koharu
Has made him a foolscap.
He wastepapers sheets of gold
Till his fortune's shredded to confetti
And Jihei himself is like scrap paper
You can't even blow your nose on!　（**『キーン自伝』**pp.215-26 参照）

「跡詰めてしっぽりと小春様。したゞる樽の生醤油。花車(くわしや)様さらば後に青葉の浸(ひたし)物と」。

“Ask your guest to keep you for the whole night, and show him how sweet you can be. Give him a barrelful of nectar! Good-by, Madam. I'll see you later, honey.”

近松を翻訳する際、対話を、本当の人間がしゃべっているように響かせるばかりではなく、原(もと)のテキストにある入り組んだ言葉遊びを英語で伝達する作業も試みている。縁語の効果を伝えようとしていることが理解できる。（**『このひとすじにつながりて』**p.248参照）

(8)　角田柳作は、1878（明治10）年、群馬県生まれ。早稲田大学の前身であった東京専門学校で坪内逍遥に英文学を教わった。早稲田大学名誉教授・鳥越文蔵氏の調査によると、逍遥の日記の中にも8回ほどの記述があるという。恩師との親交があったことがわかる。進取の気性に富んだこの青年は、1909（明治42）年に仏教伝道学校の招待でハワイに渡った。1918（大正7）年からコロンビア大学で講義を聞く。角田が企てた「日本文学研究所」のため日本に帰って寄付を集めた。日本文学研究所がコロンビア大学の一部として設けられ、角田は研究所長兼日本文化講師として任命された。1928（昭和3）年ごろから1941年まで、角田はコロン

ビア大学で、日本の思想史、歴史、古典文学などを教える。角田は、日本人の宗教生活への地理的要件の影響を重視して、それを「三向性」と呼んだ。第一の向性は、水に向かう。第二の向性は、太陽に向かう。第三の向性は、山に向かう性質だという。山は日本人にとって、心の故郷だとされた。したがって、日本人としての最高の体験は、富士山に登頂して、大海のかなたから昇ってくる太陽を拝むこと。これこそ三向性の一体化である、と説くのだった。85歳になっても、学生の希望により、新しい講義を喜んで引き受けた。学生たちから愛され、引退の機会は何度かあったが、そのつど、学生の要望で留まり、亡くなる直前まで教壇に立ち続けた。彼は絶対自己宣伝しない謙遜家で名利に恬淡であった。(**『このひとすじにつながりて』**の中の〈角田柳作先生〉pp. 17-21参照。)

この本のタイトルは、「つゐに無能無芸にして只此一筋に繋る」－芭蕉『笈の小文』からとったものである。(***The Blue-Eyed Tarōkaja,*** p.7 NY: Columbia University Press, 1996)

角田は、博覧強記であるだけではなく、感受性も豊かな人物であった。彼の授業ぶりは、整理された講義ノートは作らず、いつもメモ用紙一枚だけで授業に臨んだ。要するに、書いてある原稿を朗読するのではなく、いつも考えて話された。授業前に、黒板を漢文の引用などで真っ白くし、教室のテーブルの上に無数の参考文献を並べていた。

「恩師 角田柳作先生」(『早稲田學報』1994.4.) では、キーン氏は次のようにも語る。「角田先生は、アメリカの歴史や文化に関心がありましたが、アメリカの文学や芸術には関心がなかったようです。講義では、日本文学、仏教も教えましたが、近世思想史、徳川思想史を中心として、朱子学派、陽明学派といった学派よりも個々の独立した思想家、例えば富永仲基、三浦梅園、本田利明などを取り上げ、情熱をもって講義されました。角田先生にとっては教えることが職業、ものを書くのではなく、学生に知識をもって直接伝えるところに教師としての幸せを感じておられたと思います」。

また、サイデンステッカーも、「物静かだけれども熱のこもった授業ぶりで、おのずから傾聴せざるをえない力があったし、ことに、美しいもの、敬虔なるものにたいする感覚を学生に伝える才能にすぐれていた」と語っている。(『私のニッポン日記』参照)

コロンビア大学が、1953年6月に、教職からの退任を前に、学長をはじめとする150人におよぶ関係者でレセプションを開催したこと、62年に「名誉文学博士号」を授与したことは、角田先生の学恩に対する謝意にほかならなかった。(荻野富士夫著『太平洋の架橋者：角田柳作』p.120参照)

『圖書館雑誌』(昭和13年9月) には、角田柳作の講演『米國に於ける日本研究』の全文が掲載されている。最後に、講演者はコロムビア大學講師・同大學圖書館日本部長、と記録されている。(日本圖書館協會発行、pp.1-8.)

『早稲田學報』(昭和３０年7・８月号)「角田柳作氏にアメリカを聴く」の中で角田は、「アメリカ人は実證的というか、その通りを一つやって体験というか、自分の身にそのことやって見ようというなにかがあります」といい、キーンが草鞋掛で芭蕉を研究するアプローチも必要である、と擁護している。pp.6-16.

また、上毛新聞の「山河遥か 上州・先人の軌跡」第6部(番外編)に旧赤城村出身の角田柳作が、2008年9月1日～21日まで16回に渡って取り上げられた。

〈主な参考文献〉

Keene, Donald. *Meeting With Japan.* Tokyo: Gakuseisha, 1979.
_____. *On Familiar Terms.* New York: Kodansha International, 1994.
_____. *Chronicles of My Life: An American in the Heart of Japan.* New York: Columbia University Press, 2008.
キーン,ドナルド.『日本との出会い』篠田一士訳　中央公論社、1972.
_____.『このひとすじにつながりて』金関寿夫訳　朝日選書、1993.
_____.『声の残り』金関寿夫訳、朝日新聞社、1997.
_____.『私と20世紀のクロニクル』角地幸夫訳　中央公論新社、2007
_____.『ドナルド・キーン著作集』（１～９巻）解題　新潮社、2011～2013.

宮本昭三郎『源氏物語に魅せられた男―アーサー・ウェイリー伝―』新潮選書、1993.
中津義人 『ドナルド・キーン年譜』「ドナルド・キーン・センター柏崎」、2013.
荻野富士夫『太平洋の架橋者 角田柳作』芙蓉書房出版、2011.
サイデンステッカー, E. G.『私のニッポン日記』安西徹雄訳、講談社現代新書、1982.
_____.『流れゆく日々』(自伝) 安西徹雄訳、時事通信社、2004.
_____.『谷中、花と墓地』みすず書房、2008.
東京都北区立中央図書館編 『ドナルド・キーン・コレクション　図書目録』2013.
上原木呂編『ドナルド・キーン初版本蔵書目録』竹野町DK文庫、2013.
ウェイリー、アリスン.『ブルームズベリーの恋』（*A Half of Two Lives*）井原真理子訳、河出書房新社、1992.